様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １１ 日現在

機関番号：２４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３１３７

研究課題名（和文）「開港期」朝鮮を中心とする「交隣」の総合的研究：東アジア世界秩序の再検討の試み

研究課題名（英文）Comprehensive Studies on the "Kyorin" with special reference to Modern Korea: a Re-examination of the World Order in East Asia

研究代表者
岡本　隆司（Okamoto, Takashi）

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：７０２６０７４２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は19世紀後半期を中心に、朝鮮王朝特有の「交隣」という対外秩序のありようを考察することで、東アジアの世界秩序の再検討を試みたものである。「交隣」とは朝鮮王朝が中華王朝以外の国々・集団と有した関係をいい、もちろん日本や西洋諸国との関係もそこに含まれる。
　われわれはこの交隣を政治外交、社会経済、思想学術の各方面から具体的に検討することで、東アジア全体の秩序構造の解明をはかった。とくに韓国の国史研究者との共同研究を通じて、学説史と方法論を再考し、「交隣」は対等関係だとする従来の単純な論断を排して、清朝との事大関係との複雑な関連のなかで、国際関係に転化してゆく経過を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は19世紀後半の朝鮮における「交隣」の観念・実態・変遷を明らかにし、東アジア世界秩序の理解を深めることを目的としたものである。「交隣」を政治・経済・思想の各方面からみなおすことで、これまで一義的に対等関係とみなされてきた「交隣」の実体・動態を解き明かしたばかりではなく、東アジア全体の世界秩序を読みなおす足がかりをえた。
　朝鮮半島は今も昔も東アジア国際関係の焦点である。その秩序のありようが現代の国際政治にも影響を与えており、歴史的な対外観念・世界秩序の考察を抜きにして、東アジア国際関係の構造は十分に理解できない。本研究の成果はそうした面でも意義あるものである。

研究成果の概要（英文）：　This study aims at a reexamination of the world order of East Asia during the late 19th century through the research on the "kyorin"which was a unique relationship of the Choson dynasty. The kyorin, literally meaning neighbor intercourse, represented Korea's relations with countries and ethnic groups except China, including Japan and Western states.
　We studied the kyorin from the viewpoints of politics, diplomacy, economics, and ideologies together with Korean researchers of the Korean history, investigated the method of previous studies, and thought of the total structure of the order of modern East Asia. The kyorin was not simply an equal relationship with other countries, but developed into the international relations of modern Korea in mixture with the relations with China.

研究分野：近代アジア史

キーワード：交隣　事大　外交　朝貢

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

朝鮮王朝の対外関係史研究は、急速な高まりをみせているが、「事大」「交隣」に関する言動の歴史的意義は、わかっていない点が多い。前の近世、後の帝国期、植民地期とどのようにつながるのか、こうした問題もなお不分明である。

このような研究動向に鑑みて、本研究は朝鮮の「開港期」を中心に、「交隣」の観念・実態を明らかにすることを通じて、東アジア世界秩序の理解を深める方針とする。19 世紀後半の「開港期」に着眼するのは、「事大」「交隣」の概念そのものが動揺し、新たな模索が始まるプロセスであり、前後の時代を見通すにも便宜だからである。近年の研究で明らかになった点はあるものの、なお多くは個別的な二国間関係の考察にとどまっている。本研究は朝鮮の「交隣」を軸に全体をとらえることで、そうした現状の打開を試みるものである。

２．研究の目的

朝鮮半島は今も昔も、東アジア国際政治の焦点である。本研究は朝鮮「開港期」における「交隣」の観念・実態・変遷を明らかにし、東アジア世界秩序の理解を深めることを目的とする。「交隣」とは朝鮮王朝が中国以外の国々ととり結んだ関係を意味し、近世の日朝関係のみならず、西洋式に条約を結んだ 19 世紀後半以降も一貫して通用し、中国との「事大」関係と並び称された。しかしその研究は閑却された点も少なくないため、専らそれを対象として言語・思想・行動のあらゆる側面から検討しなくては、朝鮮の歴史的な対外観念・世界秩序、東アジア国際関係の歴史的な構造を十分に理解できない。そこで本研究は、19 世紀後半を中心に近世・20 世紀をも視野に入れ、「交隣」関係を解明することとした。あわせて、現代の朝鮮半島をめぐる国際政治にも一定の展望を獲得したい。

３．研究の方法

本研究は 3 つのステップからすすめた。第一は、思想・政治・外交・経済という多元的な研究者が有意義に協力して研究を進めるために不可欠な共通の問題意識を形成する段階であり、第二は、メンバーが各自の担当する分野・題目に関わる調査・分析にとりくむ段階である。第三は、それぞれ分担した研究成果をとりまとめる段階で、成果を内外に公表して、その出版の準備もすすめる。

研究方法は主として、図書館ならびに文書館で文献史料を収集し、解析する手法をとる。関連する先行研究の精査に加え、各国に所蔵する根本的な文書史料にもとづいて、思想・政治・外交・経済に関わるそれぞれの論点を分析していった。とくに第三のステップで、韓国の研究者と積極的に国際共同研究を開催して、議論を深めた。その共同研究の成果として、論集の編集もすすめている。

４．研究成果

以下、上の目的に応じた全体的な研究成果の概要として、研究代表者の報告を掲載する。研究代表者・分担者の個別の研究成果は、各年度の報告書に記すとおりである。

【研究成果報告】

君主号と「交隣」――「朝貢一元体制」から韓国の「独立」まで

岡本隆司(京都府立大学)

はじめに

本稿は筆者の従前の研究成果を足がかりとして、「交隣」を中心に東アジアの世界秩序体系とその変遷を概観する試みである。タイムスパンはひとまず、それが出発した明朝の体制

から、最終的に破綻する韓国の「独立」までを視野に入れたい。

明朝が布いたいわゆる「朝貢一元体制」は、すべての通交が朝貢に「一元」化される。したがって実態がいかなる形の交わりであろうと、主観的に「朝貢」と読み替えられた。そのため、日本列島も朝鮮半島もふくむ東アジアの対外秩序全体にも、そうした読み替えは波及せざるをえない。

かくて常態化したのは、中心たるべき明朝皇帝をはじめとして、相手の地位・立場に対する客観的に正確な認識を不問に付す、いわば一方通行的な接近と応対を組み合わせる方法である。それを通じて、曲がりなりにも彼我の矛盾を顕在化させず、相互の均衡を保ち、それぞれの通交を成り立たせていた[1]。

中朝の事大関係、そして日朝の「交隣」も同じである。というよりも、その最も典型的な事例であったといえよう。むしろ「交隣」とはそうしたしくみで、はじめて機能する関係だったといってもよい。

1　明代・中世日本

明朝からみた秩序体系では、朝鮮・日本の主権者とは、当の朝鮮人・日本人の意思・体制にかかわらず、「朝鮮国王」「日本国王」であった。したがって日本の当局が、明朝・朝鮮と通交するには、「日本国王」がその代表者でなくてはならない。当の日・朝が自らどのような政体をとり、互いをどうみていたかは、そこに必ずしも関わらなかった。朝鮮の側からみて、好むと好まざるとに関わらず、敵礼にならざるをえなかったゆえんでもある[2]。

周知のとおり、日本には史上「日本国王」は、ほとんど存在しない。しかし大陸も半島も、その君主を「日本国王」とする認識を堅持していた。そこにこそ、中央政権の確立しなかった日本中世で、「日本国王使」を名乗るいわゆる「偽使」がはびこった[3]根本的な要因がある。

しかし君主号はあくまで称号であり、実体と切り離せない。列島の権力構造が変われば、従前の「偽使」「日本国王使」も、変化をきたさざるをえない。しかし半島・大陸の秩序体系が変わらなくては、そこにいよいよ齟齬が生じ、矛盾が拡大することになる。

豊臣秀吉の覇権確立・朝鮮出兵から徳川幕府の成立、そしていわゆる柳川一件にいたるまでの史実経過[4]は、そうした矛盾が顕在化したものだった。

2　近世から近代へ

日本は政体が変化したことで、君主号も変わらざるをえなかった。「日本国王」はここで名実ともになくなる。徳川将軍が対外的に称した「大君」という君主号が、以後の日朝「交隣」を維持せしめる安全瓣となる。

---

[1] 岩井茂樹「明代中国の礼制覇権主義と東アジアの秩序」『東洋文化』第 85 号、2005 年

[2] こうした点、近現代外交のアナロジー・スタンダードから、客観的な「交隣」ないし敵礼が、対等な関係であるかどうかを問題にしてきた学説史は、おそらく問いの立て方から見なおすべきものである。たとえば、最近の夫馬進『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』名古屋大学出版会、2015 年、28〜43 頁と姜東局「近代朝鮮における「交隣」概念」『朝鮮史研究会論文集』第 54 集、2016 年の所説は、まったく背反する論旨でありながら、そうした発想の根柢で選ぶところがない。

[3] 「偽使」の詳細については、日本史の領域で分厚い研究の蓄積がある。さしあたり橋本雄『中世日本の国際関係――東アジア通交圏と偽使問題』吉川弘文館、2005 年を参照。

[4] 田代和生『書き換えられた国書――徳川・朝鮮外交の舞台裏』中公新書、1983 年。

その詳細については、すでに論じたことがある[5]ので、ここではくりかえさない。ともあれ近世日本における「交隣」は、「朝鮮国王」「日本国大君」がとりむすぶ敵礼の関係となって定着した。従前の「朝貢一元体制」が清朝と日本の関係では適用されなかったこともあいまって、そこにはひとまず、前代の「偽使」のような欺瞞は存在しない。

しかしそれでも、日朝間に認識の齟齬がなかったわけではない。むしろそのギャップが顕在化しないことで、「交隣」は安定を保っていた。だとすれば、それが露顕した場合、必然的に「交隣」も危機をむかえざるをえなくなる。

すなわち君主号としてその中心的な機能を果たしていた「大君」の消滅であり、幕藩体制の崩壊である。対馬と幕府を喪失し、天皇を「大皇帝」と称した明治日本と「國王」を戴く朝鮮とは、「交隣」における対等の名分が保てなかった[6]。

中華王朝と事大関係をも有する朝鮮は、「王」を自らの君主号だと自他ともに認めなくてはならないし、「皇帝」は中華王朝以外に存在を認められない。そのために日朝間の関係が悪化し、「交隣」は動揺する。いわゆる書契問題として顕在化し、朝鮮の「自主」と日朝の「平等」を定めた江華島条約の締結を経ても、その軋みは収まらなかった。

３　「交隣」の再編と拡大

このように久しく迷走していた「交隣」は、日朝の二国間関係をこえたところで、ようやく安定をとりもどす。1880 年代の西洋各国との条約締結であった。西洋諸国との条約締結は、清朝の先例があったし、またその清朝の主導を仰ぐことも可能だった。

しかもそこには、新しい概念も生まれていた。つまり清朝は欧米と条約を結ぶにあたり、その君主号 emperor/president/king を「大皇帝」「大伯理璽天徳」「大君主」と漢訳している。そうした翻訳概念を利用することが可能だった。

朝鮮が 1882 年以降、欧米諸国と条約を結び、king の翻訳概念である「大君主」を国王高宗の称号とするに及んで、欧米との対等を獲得し、ひいては日本との敵礼をとりもどすことができた。それは従来は日朝二国間のみだった「交隣」を欧米にも読み換え、拡大することで、ようやく可能となったものだった。

しかしながら、こうした西洋の君主号の翻訳概念は、清朝皇帝とも対等の関係だった。西洋近代の国際関係とは、そうしたものである。それなら新たな「大君主」の「交隣」は、従前の清韓事大関係と矛盾する局面が避けられない。つまり朝鮮の「大君主」が清朝皇帝と、ひいては朝鮮が清朝と対等になってしまう事態であり、とりわけ清朝がこれを恐れた。朴定陽のアメリカ奉使で露呈したこの矛盾は以後、清韓関係が孕むジレンマと化し、ついには日清戦争・甲午改革以後の朝鮮「独立」につながってゆく[7]。

４　「交隣」の終焉――むすびにかえて

---

[5] 拙稿「大君と自主と独立――近代朝鮮をめぐる翻訳概念と国際関係」『近代日本研究』第 28 巻、2012 年。

[6] 以下の論旨は、おおむね拙稿「「大君主」の興亡――近代東アジア国際関係における韓国の独立と君主号」、韓国・日本史學會 2017 年度日本史學會國際學術大會報告、2017 年にもとづく。逐一注記は施さない。

[7] 拙著『属国と自主のあいだ――近代清韓関係と東アジアの命運』名古屋大学出版会、2004 年、同『中国の誕生――東アジアの近代外交と国家形成』名古屋大学出版会、2017 年。

1895 年、下関条約が規定した朝鮮の「独立自主」は、紆余曲折を経て、現実のものとなった。1897 年の大韓帝国の成立と韓国皇帝の即位である。ただし条約から即位まで数年間かかっており、しかも君主号が「皇帝」になったことに、大きな歴史的意味がある。

朝鮮政府が当初こころみたのは、「大君主」号の対内化と公然化である。「交隣」の関係にあった欧米・日本などに対する、対外的な君主号「大君主」を国内、ひいては清朝との事大関係にも適用することで、自らの「独立自主」をはかろうとした。ところがこれでは、清朝に通用せず、やはり不十分だったのである。

そもそも「大君主」は「交隣」に対応した君主号であった。いかに欧米諸国およびその条約が関わって新しい形態になっていたにせよ、「交隣」はあくまで「朝貢一元体制」・事大関係を前提にし、そこから派生したものである。だから事大＝小中華とも不可分だった。朝鮮の「大君主」号もそのかぎりで存在、機能していたから、この君主号を保ったままでは、清韓の事大関係を否定するのは困難なのである。いわゆる「三端」問題と朴定陽の行蔵が、それをよく示す事例ではあった。

そのため朝鮮が「独立自主」を果たすには、隣国・各国と対等であるばかりでなく、それを自ら明確に発信できるよう、従前の「大君主」や「交隣」のような、相互の地位・立場を主観的に解する一方通行的な称号や通交から脱却しなくてはならない。新たな地位と称号を獲得し、対外関係を一新することが必要だった。

そこで高宗政権が依拠したのは、国際法・『萬國公法』の「自主」と「尊号」の結びつきである。それを通じて「自ら尊号を立てる」ことのできる論拠を獲得した[8]のであって、日清とまったく対等な皇帝に即位すると同時に、日清の皇帝とは異なる明朝という「中華」の正統に依拠しなくてはならなかった[9]ゆえんである。朝鮮が明朝の正統を継いで、小中華ではなく真の中華となる以上、そこにはもはや対外的な事大も交隣も存在しえないのであった。

---

[8] ひとまず『承政院日記』高宗 34 年 9 月 6 日条を参照。「猗我邦開國五百年、聖神相繼、重熙累洽、禮樂典章、衣冠制度、損益乎漢・唐・宋帝、一以明代爲準、則郁文醇禮之直接一統、惟我邦是耳。按萬國公法有云「各國自主者、可隨意自立尊號、令己民推戴、但無權令他國認之」也、下文有「某國稱王稱皇之時、某國先認之、他國後認之」之語。夫尊號在我、故曰「自立」、認之在人、故曰「無權」、未聞以「無權」於人之故、而廢我「自立」之權也。是以稱王・稱皇之國、不待他國之承認、而自立尊號、所以有「某國先認之、他國後認之」之例。其所謂「先認」者、不在乎位號之先、而先於他國之謂、則安有不自立尊號、而先求他國之認者哉。今陛下巍蕩之德、與天同大、通達之道、與天同諦、以大而言皇也、以諦而言帝也、以羲・農・堯・舜之聖、接漢・唐・宋・明之統、惟今日尊大皇帝位號、準古合今、考其時則可矣。」

[9] 森万佑子『朝鮮外交の近代――宗属関係から大韓帝国へ』名古屋大学出版会、2017 年。なおこの経過と意義は稿を改めて、くわしく検討したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 岡本隆司	４．巻 989
２．論文標題 近代東アジアの「主権」を再検討する――藩属と中国	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 186-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石田徹	４．巻 別冊4号
２．論文標題 近世対馬における異国船来着とその対応―対馬宗家文書から考える「北東アジア」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 北東アジア研究	６．最初と最後の頁 235-257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石田徹	４．巻 152
２．論文標題 対馬藩における訳官使接遇の諸様相	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史の理論と教育	６．最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森万佑子	４．巻 23
２．論文標題 朝鮮政府の明治初期外交への姿勢転化 ―― 一八七四年の「密咨」到着に着目して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東アジア近代史	６．最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森万佑子	4．巻 827
2．論文標題 書評　李穂枝著『朝鮮の対日外交戦略』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史評論	6．最初と最後の頁 102，106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中純夫	4．巻 21
2．論文標題 洪大容の対外認識について――その中国体験に即して	5．発行年 2019年
3．雑誌名 洛北史学	6．最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中純夫	4．巻 77-4
2．論文標題 書評　姜智恩著『朝鮮儒學史の再定位――十七世紀東アジアから考える』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東洋史研究	6．最初と最後の頁 187-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石田徹	4．巻 76-4
2．論文標題 書評：池内敏著『絶海の碩学―近世日朝外交史研究―』	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東洋史研究	6．最初と最後の頁 176-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石川亮太	4．巻 1
2．論文標題 日清戦争前後の「朝鮮通漁」と出漁者団体の形成―朝鮮漁業協会を中心に	5．発行年 2017年
3．雑誌名 今西一・飯塚一幸（編）『帝国日本の移動と動員』大阪大学出版会	6．最初と最後の頁 21-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　6件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 岡本隆司
2．発表標題 「東方問題」から「朝鮮問題」へ――宗主権をめぐる国際法と翻訳概念
3．学会等名 第18回日韓歴史家会議「国際関係――その歴史的考察」（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 森万佑子
2．発表標題 交隣修好と衛正斥邪のあいだ ―朝鮮政府の明治初期外交への姿勢転化を中心に
3．学会等名 東アジア近代史学会　2018年度第22回大会（招待講演）
4．発表年 2018年

1．発表者名 石川亮太
2．発表標題 平井健介『砂糖の帝国ー日本植民地とアジア市場』へのコメント
3．学会等名 社会経済史学会近畿部会・経営史学会関西部会合同書評会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 岡本隆司
２．発表標題 中国「ギルド」論の系譜
３．学会等名 社会経済史学会第86回全国大会パネル報告「近代中国の経済「制度」のモデル」
４．発表年 2017年

１．発表者名 岡本隆司
２．発表標題 「大君主」の興亡―近代東アジア国際関係における韓国の独立と君主号
３．学会等名 韓国・日本史學會2017年度日本史學會國際學術大會《日本外交政策の歴史的展開と東アジア國際關係》（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Ryota Ishikawa
２．発表標題 Korean Merchants in Treaty ports in the Late Nineteenth Century
３．学会等名 The Long Nineteenth Century and the Foreign Powers, University of Heidelberg, Heidelberg, Germany（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石川亮太
２．発表標題 韓国開港後在来商品輸出と近代アジア市場（ハングル）
３．学会等名 順天鄕大学校人文学振興院・歴史文化学会国際学術会議「地域体系の観点から見た地方社会の再編」（ハングル）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 石田徹
２．発表標題 朝鮮「通信」使の「信」について
３．学会等名 名古屋大学人文学研究科・中国復旦大学文史研究院共催「東アジア文明観の対話――朝鮮通信使学術シンポジウム」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 岡本 隆司	４．発行年 2019年
２．出版社 新潮社	５．総ページ数 272
３．書名 君主号の世界史	

１．著者名 岡本 隆司	４．発行年 2018年
２．出版社 筑摩書房	５．総ページ数 272
３．書名 世界史序説	

１．著者名 岡本 隆司	４．発行年 2018年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 232
３．書名 近代日本の中国観　石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで	

１．著者名 森 万佑子	４．発行年 2017年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 332
３．書名 朝鮮外交の近代	

１．著者名 森万佑子	４．発行年 2017年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 56
３．書名 ソウル大学校で韓国近代史を学ぶ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石川　亮太 (Ishikawa Ryota) (00363416)	立命館大学・経営学部・教授 (34315)	
研究分担者	森　万佑子 (Mori Mayuko) (30793541)	東京女子大学・現代教養学部・講師 (32652)	
研究分担者	中　純夫 (Naka Sumio) (50207700)	京都府立大学・文学部・教授 (24302)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	石田　徹 (Ishida Toru) (90386524)	島根県立大学・総合政策学部・准教授 (25201)	